

# 文学館だより

平成28年11月1日  
若山牧水記念文学館  
TEL68-9511

おほかたの木の葉散りすぎ静かなる冬は来にけり眼にもあらはに

「くろ土」 収録

## 歌の意味

ほとんどの木は落葉してしまった。静かな冬が来たのだと目に見えてわかるようになった。

## 歌の背景

木々の落葉する冬の訪れは、どこことなく寂しい気持ちを抱かせるが、新たな生命を迎えるための一時であり、それを眺める牧水は、むしろ嬉しさを覚えるのであった。大正8年の作。

## 文学館からテレビ生中継

10月3日(月)



永井アナウンサーと荒砂

UMKスーパーニュース、ご覧になられましたか。

10月3日(月)

『みつめよう宮崎受け継がれる郷土愛若山牧水』というコーナーで、文学館が生中継されました。

文学館から荒砂が出演し『あくがれの歌人牧水』を紹介したほか、現在公開中の直筆原稿展について案内しました。

UMK永井友梨アナウンサーは『なりきり牧水』の衣装で登場。お気に召されたか、中継が終わってもなかなか着替える様子はなく、文字通り牧水になりきっていたように思います。そして、坪谷、牧水、たとえば、坪谷小学校児童による牧水の歌斉唱。今回は、

6年 黒田美侑(みゆう)さん

6年 竹内美結(みゆ)さん

5年 河野幹雅(みきまさ)さんの出演でした。

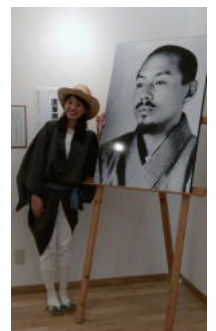
3人でも見事、堂々と澄んだ歌声を響かせてくれました。いつ聴いても心を揺さぶられます。今回3人が歌った歌は、

ほととぎす鳴くよと母に起こされてすぎる小窓の單月夜かな

更には「私たちが普段使わない題材を使っているところが牧水先生はすごい。」「坪谷の川の水がきれいなところが好き。」と竹内さんはインタビューに答えました。

わずか5分間の中継を作り上げるために総勢8名のスタッフが関わっていること、3時間前に入り入念にリハーサルを繰り返していたことには驚きました。当日を迎えるまでに何度も来館し、打ち合わせをして来られたことも付け加えておきます。

リハーサルの間中、スタッフに密着しテレビの裏側をわずかばかりかいま見させていただきました。



休憩中のひとこま

# 牧水研究会10周年記念 「牧水研究」20号記念シンポジウム 開催



地酒『幾山河』を横に牧水を語る伊藤先生

■期 日 平成28年10月9日（日）

■会 場 宮日会館

■第1部 講 演「牧水のなつかしさと新しさ」  
伊藤一彦氏

第2部 シンポジウム「牧水を今どう読むか」  
司 会 興 梠 慶一 「牧水研究」編集長  
土岐 友浩 歌人、精神科医  
大森 静佳 歌人  
伊藤 一彦 牧水研究会会長



第2部の舞台風景

講演に際し、牧水研究会発足から10年間の歩みについて伊藤先生が報告されました。牧水庵で牧水そばを食べながら意見を交わしたのがそもそもの始まりだそうです。

「新しさ」に触れる中、紹介されたのが平田オリザ氏原作・演出による映画『さようなら』でした。放射能に侵された近未来の日本。国民は次々と国外へ脱出していく中、取り残された外国人難民、ターニャと彼女に寄り添うアンドロイドとの物語です。ターニャが元気の出る詩を歌ってほしいと頼むと、アンドロイドが ～いざ行かむ行きてまだ見ぬ山を見むこのさびしさに君は耐ふるや～ と歌うというのです。

（以降は省略）近未来映画に登場するのですから、牧水はこれからも生き続けることまちがいなしなのではないでしょうか。



土岐、大森両氏

第2部は、土岐友浩さん、大森静佳さんを迎え、伊藤先生とともに牧水論を交わしました。お二人はご夫婦で歌人。大森さんは7月のNHK短歌にもゲスト出演されました。

土岐さんは ～幾千の白羽みだれぬあさ風にみどりの海へ日の大ぞらへ～ を例に挙げ、五七調のリズム、文体と牧水の大きさについて紹介しました。

大森さんは ～走り過ぐる霧に声ありわれを包みて渦巻けるなかにその声聞こゆ～ を例に挙げ、牧水の歌は『解放・拡散型』と言われ、自然や動物、見えないものなどとも一体になろうとしていると紹介しました。

前日、お二人は生家、文学館、坪谷小学校を訪れ、牧水生誕の地を堪能されました。

空白について考えようとしてそのひとが立つ窓辺を思う 土岐  
逢いたいよ飛行機雲を知らざりし牧水の眼に沈むあおぞら 大森



生家から尾鈴山を仰ぐお二人

今日から11月です  
間もなく冬到来ですね  
ん？  
これは牧水橋から撮った10月末の1枚  
ん？  
これから冬ですよ...



見に来んね！

冠山会水墨画展

場 所 文学館ギャラリー

期 日 11月10日(木)～30日(水) 無料